

障害児をもつ保護者のストレスに影響を与える要因の研究

— 定型発達児をもつ保護者との比較 —

Study of Factors Affecting Stress of Guardians Having Children with Disorders
— Comparing with Guardians Having Children Developed Typically —

白 石 京 子 *

Kyoko SHIRAISHI

要旨：本研究は障害児の保護者に対し、ストレスと養育態度、子どもの行動に対する認知、ソーシャルサポートの関連を、定型発達児の保護者と比較調査し、その結果を踏まえた効果的な支援方法を検討することを目的とする。保護者（母親）103名に対する質問紙調査に対する相関分析の結果、ストレスと有意な負の相関が認められた要因は、障害児の保護者については応答的・統制的な養育態度とソーシャルサポートであり、定型発達児の保護者については統制的な養育態度であった。また回帰分析の結果、ストレスに有意な負の影響力を持っていたのは、障害児の保護者についてはソーシャルサポートであり、定型発達児の保護者については統制的な養育態度であった。これらの結果により、応答的な養育態度や適切なソーシャルサポートが獲得できるよう支援することが、障害児の保護者のストレス緩和に有効であることが示唆された。

キーワード：保護者のストレス，養育態度，子どもの行動に対する認知，ソーシャルサポート

I. 問題・背景

子育ては定型発達児でも負担が大きいが、障害児の場合は、さらに心理的・身体的な負担やストレスが増大すると考えられる。実際、障害児の保護者（母親）は、わが子が障害をもつことに対する抵抗感が心理状態に影響し危機的な状況をもたらす（田中1996）、「生きがい」「育児」についての満足度が低い（刀根2000）、子どもの困った行動が多いほど育児に対して否定的な捉え方をする（足立・温泉・武田2002）等、ストレスが強いことを窺わせるいくつかの報告が存在する。

このような状況下、障害児をもつ保護者のストレスを軽減させる支援が求められているが、ス

*しらいし きょうこ 客員研究員・文教大学人間科学部（非常勤）

トレスと支援の関係は複雑であり（北川1995）、まずは彼女らのストレスを悪化させる要因（ストレス要因）を調べる必要がある。障害児をもつ保護者のストレス要因として考えられるものには養育態度、子どもの行動に関する母親の認知、ソーシャルサポート等がある。

養育態度とは子どもとのかかわり方のことであり、応答的、統制的、受容的といった態度が研究者らにより提示されている。莊巖ら（1989）は、養育態度として応答性を取り上げ、応答性は母親の感情的安定と密着に関連しており、応答的な養育態度を取る母親は感情的に安定しやすいと述べている。また吉川（2003）は「統制的かかわり」と「しつけの自信」との関連を調べたところ、統制的かかわりを取っている母親は、しつけに自信がなく、育児不安が強いことを示した。これらの研究は定型発達児の母親についてのものだが、障害児の母親についても同様の研究がなされている。

高木（1971）は定型発達児、自閉症児、知的障害児の母親らの養育態度を比べ、障害児の母親の子どもとの関わり方は、定型発達児に見られるような子どもの行動を理解した上でとられる相互関係的なものでなく、一方的で統制的なものだと報告した。また眞野・宇野（2007）も、定型発達児と障害児の母親の養育態度の比較をしたところ、障害児の母親は否定的な養育態度を取る傾向が有意に強かったと述べている。そのような統制的・否定的な態度は子どもの反発を招き、母親のストレスを悪化させることが推測されるが、実際、子どもの障害は母親の養育態度に影響を与え、ストレスを増加させることが報告されている（足立2006）。

次に、子どもの行動に関する保護者の認知も、ストレスに影響を与えていると考えられる。井上・柳田ら（2014）は、子どもの行動を「自分を意図的に困らせる」「挑発的で加害的」と捉える保護者はストレスを感じやすいと考え、子どもの行動に対する意識をストレス要因として挙げている。中谷・中谷（2006）は、子どもの反抗行動に対する母親の認知を肯定的認知、否定的認知、被害的認知の3種類に分けた上で、虐待的行為の関係について調査し、子どもの行為に悪意や敵意を感じる被害的認知が虐待的行為を増加させることを発見した。虐待を行う母親はストレスを抱えやすいため、この研究は子どもの行動に対する母親の認知の在り方が、母親のストレスに影響を与えることを示唆している。さらに金（2004）は、育児の中で感じる感情特性について障害児の母親と定型発達児の母親を比較し、前者は子どもの発達が気になる等、子どもの行動に対して神経質な感情を持ちやすく、疲労感が高いことを報告している。また中根（2007）は障害児には問題行動が多く、その母親は被害的認知と育児ストレスが高いことを発見している。これらの研究は、障害児においても母親の認知の在り方（特に被害的認知）と、ストレスは関係があることをうかがわせるものである。

さらにソーシャルサポートとストレスの関係も指摘されている。例えば石本・太井（2008）は、家族といった身近な人からのサポートが、障害児の母親の障害受容に有効であると報告しており、ソーシャルサポートがストレス緩和に有効なことを示唆している。ただし北川（1995）は両者の関係は複雑で詳細に検討する必要があると指摘しており、量的な調査が必要であろう。

以上の検討により、障害児をもつ母親のストレスには、養育態度、子どもの行動に対する認知、ソーシャルサポートが深く関わっていることが示唆された。そこで本研究では、質問紙を用いてその関連を調査し、その分析結果に基づいて、障害児をもつ母親のストレス軽減のための支援を検討することを目的とする。なお比較を通して障害児の母親の特徴を明確にするために、定型発達児の母親についても調査分析を行う。

II. 方法

2016年5月～8月にかけて、関東にある子育て支援広場・療育施設等に参加した2歳～7歳の子どもの保護者（母親）103名に対し、その場で調査紙が配布され、回収された。その後、障害児の母親と定型発達児の母親各5名に対し、インタビューを行った。

調査紙は属性、ストレス、養育態度、子どもの行動に対する認知、ソーシャルサポート、相談支援の場の評価を問う。属性は、子どもの性別・年齢・兄弟数、保護者の年齢（父母・祖母）、家族構成、母親の仕事（有無）である。

ストレスについては、田中（1996）の作成した母親の育児ストレス尺度を用いた。これは障害児の母親のストレスと、定型発達児の母親のストレスを比較する目的で作成されており、「子どもストレス」と「夫婦関係・母親自身の悩み」の2因子から構成される（10項目6件法）。各因子を構成する項目の得点を合計することにより、それぞれの因子得点が計算され、さらにそれらを合計することで、ストレス全体の得点が得られる。得点が高いほど、ストレスが強いことを意味する。

養育態度については、中道・中澤（2003）の作成した養育態度尺度（16項目4件法）を利用した。この尺度は「応答性」と「統制」の2因子からなり、「応答性」は「子どもの意図・欲求に気づき、愛情ある言語や身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする行動」であり、「統制」は「子どもの意図とは関係なく、母親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを統制する行動」である。

母親の子どもの行動に対する認知については、中谷・中谷（2006）の子どもの行動に対する認知尺度（23項目5件法）を用いた。これは子どもの行動を肯定的、否定的、被害的の3領域で測定するものである。

ソーシャルサポートについては、日本語版ソーシャルサポート尺度（12項目5件法）を採用した。これは岩佐（2007）が精神的健康の悪化に対する予防的介入をめざし、ソーシャルサポートの状態を把握しようと作成したものであり、ソーシャルサポートの充実度に関する主観的評価を、3つのサポート源（家族、友人、大切な人（配偶者等））から測定する。各因子得点を合計して、総合的なサポート（サポート総合）の得点を算出する。

相談支援の場の評価については、「この場に参加した理由をお知らせください」という質問文で、「居心地や雰囲気が良い」「子どもの様子が見られる」「プログラムが良かった」「親の友達が作れる」「子どもの相談ができる」「悩みを共感してもらえる」「親の気分転換ができる」「育児情報が得られる」の7項目を5件法で評価してもらった（1：そう思わない～5：そう思う）。

得られた結果は、障害児の母親と定型発達児の母親の2群に分け、各群について分析を行った。まず各尺度について尺度得点および下位尺度得点を求め、ストレスを軸として相関分析を行った。そしてストレスと有意な相関のあった要因を抽出して独立変数とし、ストレスを従属変数として重回帰分析を行った。相談支援の場の評価については、両群間の差をMann-WhitneyのU検定を用いて比較した。統計分析にはIBM SPSS Ver. 22を用いた。

Ⅲ. 結果

調査対象者103名に対し、全員から回答が得られた。回答に重大な不備は見受けられなかったため、それら全てを分析対象とした。当初、著者は保護者を想定して調査を行ったが、調査に参加した対象者は全て母親であったため、対象は母親に限定される結果となった。内訳は障害児の母親（以下障害児母）52名、定型発達児の母親（以下定型発達児母）51名である。

属性に関する基本統計量を表1に示す。障害児母・定型発達児母ともに、養育している子どもの数は平均して1.5人（1.62, 1.43）、場に預けている子どもの出生順番は中央値で1番目と、ほぼ同じであった。しかし場に預けている子どもの性別と年齢は、障害児母の方が男性73.1%、4.73歳と高く、定型発達児母の52.9%、2.04歳を大きく上回った。また親年齢も前者の方が高く、中央値で母親・父親は30歳代後半、40歳代前半だったのに対し、後者は30歳代前半、30歳代後半であった。ただ祖母年齢は定型発達児母の方が高く（70代前半）、障害児母の60代後半を上回った。家族構成では障害児母の方が核家族、祖父母同居の割合が高く（80.8%, 19.2%）、定型発達児母の60.8%, 5.9%を大きく上回った。母親の仕事については、障害児母は専業主婦、正社員の比率が67.3%, 9.6%と、定型発達児母の58.8%, 3.9%よりも高かったが、パートは21.2%に対し19.6%と、どちらも20%前後であった。

表1 属性の基本統計量

| | 定型発達児母（n = 51） | | | | | 障害児母（n = 52） | | | | |
|---------|----------------|-----------|----------|----------|-------|--------------|------------|----------|---------|-------|
| | 平均値 | 中央値 | 最頻値 | 標準偏差 | 合計 | 平均値 | 中央値 | 最頻値 | 標準偏差 | 合計 |
| 子数（人） | 1.43 | 1.00 | 1.00 | 0.61 | — | 1.62 | 1.00 | 1.00 | 0.72 | — |
| 子順番（番） | 1.49 | 1.00 | 1.00 | 0.61 | — | 1.35 | 1.00 | 1.00 | 0.52 | — |
| 子性別（%） | 男 52.9 | 女 47.1 | | — | 100.0 | 男 73.1 | 女 25.0 | 無記入 1.9 | — | 100.0 |
| 子年齢（歳） | 2.04 | 2.00 | 2.00 | 0.49 | — | 4.73 | 5.50 | 6.00 | 1.78 | — |
| 母年齢 | 3.25 | 3.00 | 3.00 | 0.69 | — | 4.17 | 4.00 | 4.00 | 1.00 | — |
| 父年齢 | 3.75 | 4.00 | 4.00 | 0.84 | — | 4.65 | 5.00 | 4.00 | 0.97 | — |
| 祖母年齢 | 2.73 | 3.00 | 2.00 | 1.20 | — | 2.71 | 2.00 | 2.00 | 1.26 | — |
| 家族構成（%） | 核家族 60.8 | 祖父母同居 5.9 | 一人親 15.7 | その他 17.6 | 100.0 | 核家族 80.8 | 祖父母同居 19.2 | 一人親 0.0 | その他 0.0 | 100.0 |
| 母仕事（%） | 専業主婦 58.8 | 正社員 3.9 | パート 19.6 | その他 17.6 | 100.0 | 専業主婦 67.3 | 正社員 9.6 | パート 21.2 | その他 1.9 | 100.0 |

子数：保護者が養育中の子どもの数、子順番：対象児の生まれ順

母年齢・父年齢：1 - 20歳代前半、2 - 20歳代後半、3 - 30歳代前半、4 - 30歳代後半、5 - 40歳代前半

祖母年齢：1 - 60歳代前半、2 - 60歳代後半、3 - 70歳代前半

次にストレスを中心とした相関分析の結果を示す（表2）。養育態度の応答性については、障害児母において全てのストレス種およびストレス全体で-0.3程度の有意な負の相関が見られたが（子どもストレス $r = -.339$ 、夫婦関係・母親自身の悩み $r = -.327$ 、ストレス全体 $r = -.379$ ）、定型発達児母では有意な関係は見られなかった。一方統制については、双方とも-0.3~-0.4の有意な負の相関が見られた（障害児母：夫婦関係・母親自身の悩み $r = -.394$ 、ストレ

ス全体 $r = -.370$ 、健常児母：夫婦関係・母親自身の悩み $r = -.413$ 、ストレス全体 $r = -.311$ ）。次に子どもの行動に対する認知では、全ての認知種において、双方のグループともストレスとの有意な関連は見いだせなかった。最後にソーシャルサポートでは、全てのサポート種およびサポート総合において、障害児母のみ $-0.3 \sim -0.7$ の有意な負の相関が得られた。ただし子どもストレスとの相関では、家族サポートと友人サポートは負ではあったが、有意な相関は得られなかった ($r = -.270, -.231$)。

表2 ストレスを中心とした相関分析

| | 定型発達児母 (n = 51) | | | 障害児母 (n = 52) | | |
|----------|-----------------|------------------|--------|---------------|------------------|----------|
| | 子ども ストレス | 夫婦関係・母親 自身の悩み | ストレス全体 | 子ども ストレス | 夫婦関係・母親 自身の悩み | ストレス全体 |
| 応答性 | -.121 | -.162 | -.163 | -.339* | -.327* | -.379** |
| 統制 | -.104 | -.413** | -.311* | -.251 | -.394** | -.370* |
| 肯定的認知 | -.221 | -.092 | -.161 | -.048 | .241 | .116 |
| 否定的認知 | .126 | .079 | .103 | .027 | .100 | .074 |
| 被害的認知 | .267 | .067 | .163 | -.041 | -.174 | -.125 |
| 家族サポート | -.181 | -.151 | -.185 | -.270 | -.684*** | -.551*** |
| 大切な人サポート | -.230 | -.177 | -.225 | -.348* | -.659*** | -.580*** |
| 友人サポート | -.151 | -.175 | -.189 | -.231 | -.527*** | -.438** |
| サポート総合 | -.196 | -.177 | -.210 | -.294* | -.650*** | -.545*** |

* : $p < 0.50$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$

続いて相関分析でストレスと有意な相関を示した要因（養育態度、サポート）を独立変数、ストレス全体を従属変数として重回帰分析を行った。なおサポートとして当初、3種類のサポートを全て独立変数として投入したが、多重共線性が発生してしまったため、サポート総合のみを独立変数に用いるよう修正し、再度分析した。その結果、双方とも決定係数は有意であり、障害児母で係数が有意だった変数はサポート総合 ($\beta = -.420, p < .01$)、有意傾向だったのは応答性であった ($\beta = -.252, p < .10$)。また定型発達児母では有意だったのは統制 ($\beta = -.338, p < .05$)、有意傾向はサポート総合であった ($\beta = -.251, p < .10$)。なおいずれの係数も負であった (表3)。

表3 ストレス全体を従属変数とした重回帰分析

| 独立変数 | 定型発達児母 (n = 51) | | | 障害児母 (n = 52) | | |
|----------------------|-----------------|--------|------|---------------|--------|------|
| | β | t | 有意確率 | β | t | 有意確率 |
| サポート総合 ^{a)} | -.251 | -1.819 | .076 | -.420 | -3.162 | .003 |
| 応答性 | .001 | .009 | .993 | -.252 | -2.005 | .051 |
| 統制 | -.338 | -2.200 | .033 | -.163 | -1.251 | .218 |
| R ² | .159* | | | .386*** | | |

* : $p < 0.05$, *** : $p < 0.001$

a) 多重共線性を避けるために、サポート総合を用いた。

さらに、相談支援の場に対する保護者の評価を調べた（表4）。項目得点は正規分布に従わなかったため、Mann-WhitneyのU検定を用いて比較したところ、全ての項目で有意差が認められ（ $p < 0.05$ ）、障害児をもつ母親の得点が高かった。定型発達児母はほとんどの項目で中央値が3.00だったのに対し、障害児母は全て4.00以上であった。

表4 相談支援の場の評価

| 項目 | 定型発達児母（n = 51） | | | 障害児母（n = 52） | | | 比較 ^{a)} |
|-------------|----------------|------|------|--------------|------|------|------------------|
| | 中央値 | 平均値 | 標準偏差 | 中央値 | 平均値 | 標準偏差 | |
| 居心地や雰囲気が良い | 3.00 | 3.41 | 1.10 | 4.00 | 4.02 | 0.85 | ** |
| 子どもの様子が見られる | 3.00 | 3.39 | 1.02 | 4.00 | 3.85 | 0.96 | ** |
| プログラムが良かった | 3.00 | 3.10 | 0.85 | 4.00 | 3.81 | 0.84 | *** |
| 親の友達が作れる | 3.00 | 3.57 | 0.98 | 4.00 | 4.21 | 0.89 | *** |
| 子どもの相談ができる | 3.00 | 3.33 | 0.99 | 5.00 | 4.35 | 0.90 | *** |
| 悩みを共感してもらえる | 3.00 | 3.43 | 1.06 | 4.00 | 4.25 | 0.84 | *** |
| 親の気分転換ができる | 3.00 | 3.39 | 0.80 | 5.00 | 4.48 | 0.73 | *** |
| 育児情報が得られる | 4.00 | 3.88 | 0.91 | 4.50 | 4.31 | 0.83 | * |

a) Mann-WhitneyのU検定（*： $p < 0.05$, **： $p < 0.01$, ***： $p < 0.001$ ）

最後に定型発達児の母親と障害児の母親、それぞれ5名に対してインタビューを行った。その結果、ソーシャルサポートについては、障害児の母親からは道具的・情緒的サポート等、「多面的なサポートが必要」であり、様々なソーシャルサポートを得て、障害の知識や対応の仕方に関する情報、同じ障害をもつ子どもに対する親情報が有効という意見が得られた。一方、定型発達児の母親からは「父親の参加」や「地域の育児情報の提供」が欲しいという声があった。「支援に何を期待するか」という質問に対しては、障害児の母親は「子どもができることの増加」、「気分転換」を求める声が多く、定型発達児の母親は「育児情報」、「子ども同士の交流」等であった。

また「子どもに対してどのような養育態度を取っているか」についての質問では、障害児母は「障害受容の課題があるので、余裕がなく、統制的になりやすい」、定型発達児母は「他の子どもと比べて統制的になりやすい」と、いずれも自らの養育態度は統制的になりやすいと答えた。又、統制的になりやすい理由としては、障害児母は「生活習慣を身につけさせたい」「危険行為を止めさせたい」等を、定型発達児母は「他児と比べて順調に育ってほしい」等を挙げていた。さらに障害児母は「これまでの経過を振り返ってみると、子どもにできることが増えていき、子どもとの関わりが充実し、育児が楽しくなった」と答える等、応答的な養育態度がストレス軽減につながることも窺えた。

IV. 考察

基本統計量では、障害児は定型発達児に比べて男性が多かった。また平均年齢も高いが（障害児4.73歳、定型発達児2.04歳）、これは保護者が子どもの障害に気づいてから子どもを施設に預けるようになるまでには、数年の時間がかかるからだと推測される。

次に相関分析では、ストレスと有意な相関があったのは、養育態度とソーシャルサポートであった。まず養育態度のうち応答性は、障害児母において、全てのストレス種およびストレス全体と有意な負の相関を示していた。これは子どもと応答的な関わりを持つ障害児母は子どもや自分自身の悩みが少なく、応答性がストレス軽減に関連していること示唆している。一方、統制は障害児母、定型発達児母の双方において、夫婦関係・母親自身の悩みとストレス全体と有意な負の相関を持っていた。この解釈は困難だが、子どもに対して統制的な関わりを持つ傾向が強い人は、物事全般に対して統制的な態度で臨むため、ストレスを感じにくい可能性が考えられる。

子どもの行動に対する認知では、双方の母親群において、いずれの認知種もストレスと有意な相関を示さなかった。これは行動に対する認知の在り方は、ストレス要因ではないことを示唆している。本研究では当初、被害的認知を持つ保護者はストレスを強く感じる、つまり被害的認知とストレスの間に正の相関を想定していたが、そのような事実は確認できなかった。なお認知とストレスの関係については、障害児母は「夫婦関係・母親自身の悩み」と関係が強かったのに対し、定型発達児母では「子どもストレス」と関係が強いという違いが見られ、今後の課題となった。

ソーシャルサポートにおいては、障害児母のみ、全てのサポート種およびサポート総合は、夫婦関係・母親自身の悩みおよびストレス全体と有意な負の相関があった。さらに大切な人サポートは、子どもストレスと有意な負の相関があった。これらのことは、ソーシャルサポートはどの種であれ、障害児母に対して、育児や夫婦関係、母親自身のストレス軽減に有効なことを示唆している。その一方で、ソーシャルサポートはどの種も、定型発達児母のストレスとは有意な相関がなく、定型発達児母については、ソーシャルサポートはストレス軽減にさほど有効ではないことが窺えた。

次にストレス全体を従属変数とした重回帰分析では、障害児母において、サポート総合が有意な負の影響力を持っており、ソーシャルサポートは、ストレスの全般的な軽減に有効であることが示唆された。また養育態度のうち応答性は有意ではなかったが、極めて有意に近い有意確率であり ($\beta = -.252, p = .051$)、対象者数を増やす等、調査条件を変えることによって有意になる可能性がある。一方、定型発達児母においては、統制が有意な負の影響力を持っており、統制的な養育態度がストレス軽減に有効なことが示唆された。ただし相関分析の部分で述べたように、これは物事に統制的な態度で臨むことが、結果として全般的なストレスの軽減に繋がることを意味していると解釈するのが自然だろう。またソーシャルサポートは有意傾向の影響力を持っており、定型発達児母についてもソーシャルサポートの一定程度の有効性が窺われた。

相談支援の場の評価については、障害児母の方が高く評価していた。特に「子どもの相談ができる」「親の気分転換ができる」は5.00（中央値）をつけており、障害児母は育児相談や気分転換のニーズを強く持っていることが窺えた。また「育児情報が得られる」に関しては、障害児母・定型発達児母ともに高い評価（4.50, 4.00）を与えており、両者で育児情報のニーズが高いことが分かった。

インタビュー結果に関して述べると、障害児の母親は「多面的なサポート」「気分転換」「子どもができることの増加」を求めている人が多く、岩崎・海蔵寺（2009）と同様の結果であった。一方、定型発達児の母親は「父親の参加」や「育児情報の提供」「子ども同士の交流」を要望する人が多かった。また養育態度については、双方の母親はいずれも統制的になりやすいと答えた。しかし統制的になりやすい理由は異なっており、前者は「生活習慣を身につけさせたい」

「危険行為を止めさせたい」等、現在の生活に密着した理由を挙げているのに対し、後者は「他児と比べて順調に育ってほしい」等、主に将来への期待を述べていた。又、どちらも子どもが言うことを聞かない等の悩みは多く、共通の課題でもあった。このことをプログラムに活かしていきたいと考える。

以上の結果をまとめると、障害児をもつ母親には、ソーシャルサポートを与えることや、応答的な養育態度を身に着けることがストレス軽減に有効と考えられる。従って周囲の人々からの適切なサポートや、応答的な養育態度を促す支援プログラムの提供が、望ましいであろう。

一方、定型発達児をもつ母親に関しては、量的分析からは、ソーシャルサポートは有効であるという結果が得られたが、インタビューから「父親の参加」や「育児情報の提供」といったサポートが要望されたことを鑑みると、障害児母ほどでないにせよ、定型発達児母においてもソーシャルサポートは有効であると推測された。これらの結果は今後の乳幼児をもつ保護者の支援に活かしていきたい。

参考文献

- 田中正博（1996）障害児を育てる母親のストレスと家族機能 特殊教育学研究 34, 23-32
- 刀根洋子（2002）発達障害児の母親のQOLと育児ストレス—健常児の母親との比較 日本赤十字武蔵野短期大学紀要 15, 17-24
- 足達淑子・温泉美雪・曳野晃子・武田和子・山上敏子（2002）1歳6か月児の母親の養育行動—質問紙調査からみた具体的行動、育児ストレス、認知の関係について— 行動療法研究 26（2）69-82
- 北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男（1995）障害幼児を育てる母親へのソーシャル・サポートの影響 特殊教育学研究 33（1）35-44
- 莊巖舜哉・益谷真・今川真治・中道正之（1989）母親の感情表出スタイルと13か月齢の子供の感情行動 教育心理学研究 37, 353-358
- 高木豊志子（1971）母子力動関係と母親の養育態度に関する一考察 平安短大紀要 2, 82-92
- 吉川昌子（2003）幼児をもつ父親の養育態度と育児不安との関連 中村学園研究紀要 35, 47-53
- 眞野祥子・宇野宏幸（2007）注意欠陥・多動性障害児の行動特徴と母親から子どもへの情動表出について 小児保健研究 68（1）28-38
- 足立智昭（2006）ユニークフェイス児を持つ乳幼児の母親の心理的適応とその援助に関する研究 平成15年—17年度科学研究成果報告書補助金研究成果報告書 24
- 井上和博・柳田信彦・窪田正大・深野佳和・赤崎安昭（2016）発達障害児を持つ母親の育児ストレス—児童発達支援事業所における調査の解析— 鹿児島大学医学部保健学科紀要 26（1）13-20
- 中谷美奈子・中谷基之（2006）母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響 発達心理学研究 17（2）148-158
- 金孝順（2004）障害児をもつ母親が育児の中で感じる感情特性に関する研究 九州大学大学院人間共生システム専攻修士論文
- <http://www.hues.kyushu-u.ac.jp/education/student/pdf/2004/2HE03026M.pdf>（2017年1月16日閲覧）
- 中根成寿（2007）障害は虐待のリスクか—児童虐待と発達障害の関係について— 福祉社会研究 8, 39-49
- 石本雄真・太井裕子（2008）障害児を持つ母親の障害受容に関する要因の検討—親からの認知、母親の経験を中心として— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 1（2）29-35
- 中道主人・中澤潤（2003）父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要 51, 173-179
- 岩崎久志・海蔵寺陽子（2009）軽度発達障害児をもつ母親への支援 流通科学大学論集 22（1）43-53
- 岩佐一・権藤恭之・増井幸（2007）日本語版「ソーシャルサポート尺度」の信頼性ならびに妥当性—中高年者を対象とした検討— 厚生指標 54（6）26-33